

(一社) 大学女性協会奈良支部主催 留学生に聞く「私の国の女性たち」(報告)

志垣瞳

2023年2月5日(土) 13:30~15:30 留学生との文化交流事業「留学生に聞く『私の国の女性たち』」を、奈良女子大学コラボレーションセンターZ306教室を対面会場として、ハイブリッド形式にて開催した。この開催は大学女性協会文化交流委員会の共催、奈良女子大学国際交流センターの後援によるものである。

プログラムは中道奈良支部長からの趣旨説明、留学生5名による発表と質疑応答・意見交換、参加者との交流、閉会の挨拶であった。お話をしてくださった留学生は次の5名である。

奈良女子大学理学部化学生物環境学科1年生 權荷秦(グォン ハジン)さん(韓国)、天理大学国際学部地域文化学科日本研究コース2年生 Van Thi Ngan Hieu (ヴァン ティ ギャン ヒウ)さん(ベトナム)、奈良女子大学文学部3年生 Marianne Fortrie (マリアン フォルトリ)さん(フランス)、奈良先端科学技術大学院博士後期課程2年生 Don Pietro Saldajeno (ドン ピエトロ サルダヘノ)さん(フィリピン)、奈良女子大学文学部特別聴講生 孫婉榛(ソン エンシン)さん(台湾)。

ハジンさんのテーマ:「結婚と出産より自分の人生を優先する韓国の女性」

近年韓国では女性が高等教育を受ける機会に恵まれ、2005年から女性の大学進学率は男性を上回るようになったが、女性の雇用率は50%で男性より20%も低く、男女間の賃金格差は世界で最も大きい。また結婚・出産を機に仕事をやめてキャリアの断絶を余儀なくされる。安い賃金・高い物価という生活不安の中で、子育て・教育に高い費用がかかる。高齢化が猛スピードで進む中で高齢者の貧困率や自殺率が高く、高齢者にとって必ずしも生活しやすい社会ではない。こうした現状から、結婚が自分の人生の幸せに必須とは思わない女性が増えている。これからは、男女が平等に育児をするという価値観や女性がキャリアを断絶しなくてもいい社会になってほしいというお話があった。

ヒウさんは先ず、日本では道にごみ箱がないこと、コンビニなど至るところにトイレがあることなど、日本に来て驚いたことをいくつか紹介された。次に、ベトナムでは親は子供から面倒を見てもらい、子供たちは親に仕送りをするのに、日本ではどうして親にあまり仕送りをせず、親と子が離れて暮らしているのか教えてほしいと質問があった。

その後、戦争時代、祖国独立のために戦って処刑された国民的英雄ブォー・ティー・サウさんの紹介。さらに、独立後の昔と現在を比べながら、今日では結婚相手を自分で選べるようになったこと、結婚後も共働きが認められ、経済的に自立できるようになり、場合によっては離婚に踏み切ることができる時代を迎えたことなどのお話の後、ベトナムの女性に大きな希望を与えた実業家グエン・ティ・ギトさん(フォーブスによるアジアで最も影響力のある女性トップ50の一人)の活躍を紹介して発表を締めくくられた。

マリアンさんは祖母、母、自分の世代間で女性に関する考え方がずいぶん変わり、そ

れぞれきわめて違った社会文化的背景の中で育ったとのことで、フランスの歴史の中でフェミニズムがどのように定着してきたかを1789年のフランス革命以後の史実を通してお話された。その節目となったものは1791年「女性と市民の権利宣言」、1882年「フェリー法による6～13歳の男女教育参加の施行」、1944年「女性の選挙権獲得」、1945年「女性が選挙初投票」、1947年「女性が初めて大臣に」、1967年「ノイヴィルト法制定により避妊具の合法化」、1975年「シモーヌ・ヴェイク法制定による中絶の合法化」、1982年3月8日「全国女性の権利の日制定」などである。

その後、「私の身体、私の選択」という言葉の意味について説明があり、現在のフランスでは、子どもを産むかどうかは女性が決めることができ、大多数の人が子どもを持つことの社会的プレッシャーを感じていない。また、「私の身体、私の選択」という表現は、女性の身体に対する社会的プレッシャーからの解放を意味し、人間の美しさはその多様性にあると話された。

ドンさんのテーマ:「フィリピン人女性の有り様・19世紀から現在まで」

19～20世紀前半にかけてフィリピン女性の理想とされたのは控えめで女らしい、美しく純粋で、キリスト教の熱心な信者であること。このような女性をマリア・クララといったそうである。とはいえ女性は決して消極的で行動を起こさないのではなく、1896年スペインからの独立革命時には、兵士に食料や薬を与え、スペイン軍に逮捕されても黙秘を貫いた84歳の女性、革命軍の士官として戦った女性教師など女性の果敢な活躍の紹介があった。

20世紀には女性の社会進出が始まり、政治・経済・科学界などで大きな役割を果たすようになった。その代表的な女性が Deng 熱・はしかなどの研究により多く子どもの生命を助けたフェ・デル・ムンド、フィリピンで最も大きな書籍販売会社を設立したソッコロ・カンシオ・ラモス、初の女性大統領コラゾン・アキノなどである。

21世紀社会で活躍する女性は二人目の女性大統領アロヨ、法律家で国際刑事裁判所裁判官ミリアム・デフェンソル・サンティアゴ、名古屋大学・大阪大学で学んだ分子生物学者シンシア・サロマなどである。今日フィリピンの大学卒業者は女性が56.1%であり、男性の43.9%を大きく上回っている。大学の教授、准教授は男性より女性が多く、政治、法学、科学研究など様々な分野で女性の活躍が目覚ましい。現在フィリピン大学教授のシンシア・サロマ氏は「フィリピンは働く女性、特にアカデミアで働いている女性にとって良い場所だと思う。私の経験から言えばフィリピンのアカデミアの環境はヨーロッパや日本やアメリカなどのように男性中心ではない。そういう意味でフィリピンのほうがアカデミアで活躍しながら家族を育む女性にとって住みやすい場所です(CNN Philippines)」と述べている。サロマ氏はドンさんの指導教員であったとのことで、女性が活躍しているフィリピン社会を誇らしげに話されていたのが印象的であった。

ソンさんは副題を「教育と女性・私も女だ(LGBT)」として台湾の女性について話し

れた。台湾は 1911 年に建国され、今年 113 年目を迎える。1940 年代に国民政府が来て以来 1980 年代まで戒厳令が敷かれ、社会は不安定であった。建国当初から農業が中心で多くの方が貧しい生活を余儀なくされたが、1960 年代から産業の中心が工業に変化して経済発展がみられるようになった。技術力や労働力のニーズが高まり、義務教育が 9 年に延長されたことにより、女性の就学率が上昇し、さらに女子のための高校や専門学校も増加した。戒厳令下にあった 1982 年には台湾初の女性副大統領呂秀蓮がかかわった「女性開花雑誌出版社」が設立された。これは女性主義や婦人問題を社会に意識させる台湾で初めての女性運動と思われる。1990 年代に戒厳令が解除され、さまざまな主張が自由にできるようになった。女性の大学進学率が増加して女性が社会進出することで社会的立場が少しずつ向上し、女性の理想は家庭の良き主婦になることだという考え方にも変化がみられる。男性中心主義の考え方も男女平等の社会へと変化している。

さらに言えば台湾は 2019 年にアジアで初めて同性婚を認めた国である。性別は単に生理的、生物的側面からだけではなく、「私も女性だ」と性自認する「社会的性」もある。つまり、女性にはいろいろな姿があるということ。したがって性別云々の前に人間として認められるすべての権利があれば性にこだわる必要はないのではないかと、性に対する新しい主張を述べられた。

5 人のお話の後、参加者との交流や質疑応答の時間がとられた。今回は留学生同士が日本のいいところ、男女平等についてのお国柄、それぞれの国の女性の地位、セクハラについてなどをお互いに質問しあって親睦を深める姿が印象的であった。ヒウさんの質問に対しては参加者から、「日本でも昔は親の面倒は長男がみるという考え方があったが、今は年金制度や介護保険制度が充実し、老後、親は子供から自立して生きている場合が多い」という回答があった。

最後に文化交流事業担当の岡崎優子理事から、「それぞれの国の話には日本でも大いに関心を持って考えなくてはならない問題が提起されていてとても参考になった」と閉会の挨拶があった。

参加者は対面：留学生 5 名を含む 15 名、Zoom：18 名で合計 33 名であった。対面では発表者の友人である留学生たち 5 名が参加、オンラインではヒウさんのお父さんがベトナムから参加され、国際交流にふさわしい会となった。

なお発表者の国を理解するために関係国の GGGI や人口・面積・高等教育普及率などの一覧表が、開会に先立って中道支部長から関係者にメール配信された（交流会資料参照）。